

地球一周の船旅 2016 ⑥

【太平洋・帰国編】



2017年2月

旅のチカラ研究所 植木圭二

地球一周の船旅を2016年4月12日～7月26日の106日間で行ってきた。既に旅行記は出航準備編からアメリカ編までを発表してきた。今回は最後になる太平洋帰国編として太平洋、ハワイ、日本、そして帰国後の振り返りまでをまとめた。

第一章 太平洋～ハワイ

■洋上運動会

広い太平洋に出て日本帰国までの寄港地はあとハワイだけ、船では様々なイベントが行われる。だいぶ以前から洋上運動会の準備が進んでおり、徐々に運動会で盛り上がってきている。

本日は朝から運動会一色になっている。赤、白、黄、青は誕生日で分けており、私は赤組である。人数に公平を期すために同じくらいの人数になるように誕生日の分け方を決めたという。

開会式もその後の進行も通訳が入る。今までは英語通訳だけであったが、現在は25名のエル・システマのメンバーもいるので、日本語のあとに、英語、スペイン語と通訳が入る国際的な催しとなる。エル・システマのメンバーは若者が多く、英語の先生や通訳も若いので、競技に参加しているメンバーは国際色豊かである。この狭い船上デッキでは危ないので年寄り控えた方が良くかもしれない。よく考えるとそれは楽器を弾く人たちも同じかもしれない。だからエル・システマの専属ドクターがカバンを持ってずっと競技観戦をしている。

エル・システマが乗っているので、開会式のファンファーレや表彰式の音響効果は本物の楽器で生演奏してくれる。トランペット、トロンボーン、クラリネットの3本の音色が洋上に響く。

これだけでもすごいと感動してしまう。

優勝チームには特典があって、打ち上げのビールが 100 円になるという。大したことはないが、ニンジンがぶら下がると人間はモチベーションがあがる。

昼食メニューは 3 か所ある船内のレストラン全てで運動会特別メニューのカツカレーである。

私も〇×クイズというのに参加する。問題のミスが 2 問あり、一度席に帰りかけること 2 回である。司会者は手作りの競技だから多めに見てほしいという。それにしても、あまりにお粗末である。

最終的には私が属する赤組が優勝する。100 円のビールをたくさん飲む。しかし打ち上げはいろいろな集まりで各組入交ってワイワイやるので、結局赤組の人がビールを大量に振る舞うことになる。

運動会は異様な盛り上がりを見せる。若者たちにとっては学園祭の再現のようで、年配者にとっては老人ホームの学芸会のようなかもしれない。

私はエル・システムの人や英会話の先生たちが、この日本的な運動会というものをどのようにとらえているのか妙に気になる。

なぜ、そんなにこの人たちはこんな運動会で盛り上がれるのだろうかという冷めた自分もいる半面で、大きな声をあげて応援する自分もいて複雑な心境になる。

ここでもまた一生懸命販売や片付けをしているクルーの姿と重ね合わせてしまう。

■太平洋は平穏

海はおおきなうねりが感じられるが、小さな波はないので太平洋というのはこんな感じかと思ってしまう。世界のどこの海に行っても波は気象状況により変わるのだから、太平洋特有の波はないはずだが、それを感じるのは旅行者のセンチメンタルかもしれない。

本日は女性 2 人と昼間からバーで話す約束になっている。一人の女性が起業を考えているのでいろいろ意見や情報を知りたいというので、運動会の翌日の設定にして本日になる。話の詳細は別に機会の譲るとして、起業とは、ビジネスとはという話を若い女の子と話せるとは実に面白い。自分が 30 才くらいの時に定年退職した親や叔父さんに聞くことがなかったので、なぜ聞かなかったのだろうかと今になって悔やんでいる。

そして情報が一つ、グアテマラで強制下船があったという。年配女性の 4 人部屋で、その一人が乗船してからいつもお金が無くなると騒いでいるという。そこで最近旅行会社が部屋に入り荷物を全て調べた結果、問題のその一人が悪いと判明した。とてもこんな人と一緒に住めない所以他の 3 人が部屋を出ることになった。

そうすると問題は一部屋余分に使うので使用料金が別に発生する。旅行会社は当初その 3 人に追加の部屋代を請求したが、そんな事情で部屋を変えてもらったのに払う義務はないと突っぱねたところ、確かにそうだというので原因をつくった問題の一人に請求をしたという。そうしたらその人は払わないと突っぱねた。払えば非を認めるからだろう。

そこで船長判断で強制下船になったという。もう小学生低学年レベルの話なのであきれてしまう。

午後から体調の異変に気が付く、どうも風邪をひいたようで、あるいはひきそうで寒気がする。妻もゴホンゴホンとしていてそれがうつったのかもしれない。日本で仕事をしていたついこの間までは、1年に一回くらいしか風邪をひかなかったが、この船に乗って3カ月で2回も風邪をひいている。

船のベンチレーションが悪いのでどこかで風邪をひくと船中に蔓延する。講演会などで人が集まる所でゴホンゴホンをやっているのが気になる。それがうつるのか分からないが、風邪薬をもっと持ってくればよかったのというのが夫婦の反省である。

■七夕

今日は船の揺れが大きい。船揺れは航路説明会で細かく教えてもらったが、大まかにはローリングが横揺れでピッチングが縦揺れである。そして今日は縦揺れなのでピッチングになる。

私たちの船室は船尾に近い方にあるので、船が縦に揺れると船の底が波にぶつかる音が聞こえる。この音というよりも衝撃は船が壊れないかと心配するくらいのものだが、そのうちに慣れてしまう。基本的にはハリケーンなどを回避して航行しているので、そんなとんでもない大揺れはない。

それでも、船内放送では揺れているから注意してくださいというアンアウンスが流れる。まずは日本語、そのあとに英語、そしてスペイン語と続く。

今思うに当初はバミューダトライアングルの中には入らないという航路説明であったが実際はコース変更しており、あの時も気象状況での判断だったかもしれない。

本日は風邪で体調不良のため英会話教室を欠席する。この原稿も部屋にこもって書いているがさすがにつらい。焼酎でもゆっくり飲みながらのんびりと過ごすことにする。

7月7日は七夕である。イベントとしてはお茶会やら夜のデッキの照明を消して星空観賞などがある。ただ、星空観賞は曇り空なので期待できない。それ以前に私の体調が風邪で不調なためにイベントには参加しない。

七夕なのかどうかは知らないが、本日の夕食は和食のディナーである。おしゃれをしてレストランに来てくださいと船内新聞には書いてある。

廊下を歩いているとエル・システマの女性メンバーがおしゃれをして歩いてくる。思わずビューティフルと声をかけてしまうと、スペイン語で何かかえってくる。多分ありがとうみたいな言葉であろう。彼女たちはスタイルもいいし衣装センスも良い。普通はそうだろう、世界を相手にする音楽家だから当たり前の常識であろう。

エル・システマの活動資金ねん出のためにチャリティーオークションなるものが催される。残念ながら風邪気味なので私は参加しないが、どんなものがあるかと紹介しておく。

まずエス・システマのプラベートコンサート、レセプションの受付嬢とのディナー、ベネズエ

ラお土産セット、汽笛を鳴らせる、ハワイの出航式で好きな曲をリクエストできる、航路説明会で説明している元タンカー船長の事務局長のおすすめ海図プレゼント、スタッフとティータイムなどなどおもしろそうである。

あとで聞いた話ではプライベートコンサートは11万円で落札されたという。

妻は友人の誕生日会に招待されていたので、少しめかしこんでプレゼントを持って出て行った。私は体調不良でディナーどころではないので簡単に9階のカジュアルレストランで麻婆豆腐丼をいただく。

妻が帰ってきて食事が良かったという。メニューを持ち帰ってきて七夕の特別メニューで和食懐石である。確かに豪華ではあるが、体は欲していなく食欲はない。

体調の良し悪しは幸せになるかどうか非常に左右すると強く思う。

■さまざまな人々

今日も船揺れが大きい、そして私の風邪も小康状態である。そして注意アナウンスが3カ国語で放送される。

朝食の帰りに船内を見回すと、改めていろいろな人が乗っている。CDラジカセを持ってきてデッキで一人聞いている人、もくもくとウォーキングする人、ジム通いで体を鍛える人、太極拳やヨガをやる人も多い。聖書を読む会というのがあって朝から聖書をみんなで読んでいる人たちもいる。

朝から晩まで麻雀をしている人達、同じく囲碁、将棋に興じている人々。本を読んでいる人、編み物をしている人、人の悪口ばかりを言う人、本当にさまざまである。

講演会の講師陣も様々で、素晴らしい人もいるが、半分以上はがっかりすることが多い。

最近、農業や食についての講演を聞くが、どうも観点がずれている感じがする。例えば食品の工業化が進み、農業も工業化して大量生産になっているが、そのため環境破壊や食の安全の確保できないという。

全く持って次元が異なることを表裏一体の功罪のように説明する。長い間電気メーカでエンジニアをしていた私には理解できない。工業化とは品質確保と安価に提供することを同時に実現させるという目的で進める。中にはそういない業者やシステムがあるかもしれないが、二者択一の問題ではない。むしろ最近の若者はコンビニ弁当しか食べない者が多くなっているのはその品質や安全性を評価しているからである。

それなのに講師のいうことは常に正しい、そのように紹介したりする。聴衆それも高齢者は納得してしまう。

私の母が80才以降私たちと同居していたが、母の口癖はテレビで言っていたから正しいという。それは一つの見解で全てがそうではないと説明しても、年をとると善か悪かという単純な判断になるようであると当時は感じていた。

この船はもともと思想的にはリベラルと言われている。確かに講師も乗客も保守的な思想の人は見かけない。沖縄辺野古基地の反対署名、安保法制の反対署名などやっている。それを船側が

促進しているようにもとれる。政治色の強いものはこういう船ではやらないのが暗黙のルールと私は思っている。

年配者はともかくも若者も一方的な思想に洗脳されるのはかわいそうに感じる。でも今の若者は洗脳さえもされないかもしれない。信じるものはネットだけだからか。

■一流商社を辞めて

起床して、体が軽い。風邪は完治し体調はほぼ戻ったようである。早速ウォーキングで汗をながす。船は揺れているが、風は心地よくウォーキングにはちょうど良い。さすがに朝食も旨い。

朝食で3カ国語を話せる通訳女性と同じテーブルにつく。日本語、ネパール語、英語が話せるが、なぜネパール語かという子供の時にネパールに住んでいたという。父親が三菱商事に勤めていたが若くして退職して医学部に再入学してネパールの医者になったという。そのため家族全員が国際色と医学色が強い。現在は日本を生活の拠点にしているが弟と妹は医者という毛並みの良さである。彼女もいずれ国連で働きたいと話している。

同席した人からは三菱商事を辞めたお父さんに話が集中する。26才の時ネパールで働く医者の本を読んで感動したので会社を辞めて医学部に入りなおすのは、そう簡単にできることではない。人間は感動で動くと思ってしまう。でもやはり決断力と実行力がその人の人生を切り開いていくのだろう。

今度はそのお父さんが船医でこの船に乗りたいという。

いつの間にか日本時間との差は18時間に広がっていて、日本は翌日7月10日が参議院選挙の投票日になっている。

■北緯14度、太平洋に想う

太平洋はやはり雄大で、島も陸地も見えないままに6日間も過ぎている。天候も回復してきており、昨晚も部屋から星がきれいに見えていた。本日正午で気温30℃、海水温29℃なので適度な暑さではある。プールサイドで甲羅干しする人もいればジャグジーでゆっくり浸かる人もいる。

近日中にカルチャースクールなどの成果発表会があるので至る処で練習する風景を見る。そんな中、私は風邪の菌を一掃するためにゴルフ&サウナに行く。やはりサウナ後に飲むビールが最高である。

航海図を見に行く。船は北緯14度22分、西経134度48分にいる。当初の予定航路と実際の航路が記載されているので、ハリケーンを避けて航路を南に取ったことが分かる。

目指すハワイも北緯20度付近なのでもう少し北である。さらに北回帰線は北緯23度27分で夏至を過ぎたばかりなので太陽はまだ北にある。そろそろ太陽が頭上にきて影が真下、つまり影ができない現象を見ることが出来るかもしれない。

北緯14度というと北極星は水平線に対して14度上に見えることを意味している。

夜になって北極星を見る。14度というとかなり低い位置かと思ったがそうでもない。その反対

側つまり南にはまだ南十字星を見ることができる。こちらは14度よりもさらに低い。この海域では南十字星はその十字架の軸が少し右に傾いて、4つの星のうち2つはよく見えるがあとの2つはだいぶ暗い。

南十字星とは星座で、正確には南十字座である。英語ではサザンクロスと呼ばれていて航海には欠かせない星座になっている。この十字はまさしくキリスト教の十字架のような形で長軸を下に約4倍延長する位置が天球の南極を示している。そのポイントの反対側に北極星がある。だから北極星と南十字星を同時に見ることができるのはこのあたりの緯度しかないのだろう。

北半球では北極星さえ見れば自分の緯度が分かるが、南半球ではそれを分かるのは南十字星ということになる。

これも居酒屋で聞いた話、南十字星を一つの星と思っているおばさんがいるという。みんなには十字に輝く大きくそしてきれいな星だと言っているという。漫画なんかで出てくると確かに大きく十字に書くかもしれないが、そのまま年を重ねて幸せな人かもしれない。そんな人がリピータだと言って何回も地球一周をしているというのだからこの船は面白い。いや失礼、会うことがあれば教えてあげよう。

今夜は月が三日月でやや明るい。だから明日以降は月明かりが邪魔になって南十字星の4つの星全てを見るのはさらに難しくなるだろう。

そして旧暦の七夕に近づいている。七夕は旧暦の7月7日なので月は必ず半月になる。旧暦は月の満ち欠けで日付を刻むので、1日は新月で15日は満月になる。今夜の月の形からすればあと4日くらい、ちょうどハワイ寄港日あたりが旧暦の七夕だろう。

第二章 ハワイ

■ハワイデー

ハワイが近づき、船内はハワイデーという催しで一日いろいろなイベントがある。ハワイの紹介やら真珠湾攻撃の話やハワイアンライブもある。私も福岡のTさんからもらったハワイ土産のTシャツを着て船内を歩くことにする。

ハワイアンライブと称するフラダンス関連の催しに居酒屋や英会話友達の何人かが出演するので、見物と写真を撮りに会場の船の後方デッキに行く。太平洋をバックにステージができていて海にできる航跡が最高の演出になっている。

ハワイアンダンサーズは男性も何人か混じっているが女性主体で総勢100人くらいの大所帯である。フラダンスとタヒチアンダンスの両方を踊っていたが、タヒチアンダンスが私にとっては新鮮でテンポよく、心地よい。3カ月の期間ではまずまずの成果ではないだろうか。

仙台のSさんの奥さんも出演している。彼女は乗船してからフラダンス教室に参加して、すっかりはまってしまっている。その旦那さんは奥さんのビデオ撮影にひたすら汗を流している。子供の運動会のビデオを撮る父親のようだ。ビデオ撮影が終了した旦那さんとビールを飲んでいると出演の奥さんが戻ってきて私の妻も入れて軽く打ち上げをする。



Sさん夫妻もこの船は初めてなので、あれも持ってくればよかったとか、これはいらなかったなどの話になる。確かに次回があれば必ず持ってきたいものというのがある。

Sさんは現地のプレゼント用にボールペンという。アジアやラテンアメリカでは日本製ボールペンは人気があって、奥さんが現地の子供とその母親から聞いたことがあるそうで、日本製のボールペンが欲しいと言っていたという。

■ハワイは間もなく

船の速度が明らかに昨日よりも遅くなっている。ハワイが近づいており時間調整のためであろう。それにしても海の色が青い。群青色というか藍色というか、きれいな青色をしている。空の青よりも深く、今まで見てきた大西洋の海に比べて明るい。

日本で行われた参議院議員選挙に関連して、この船においても洋上模擬選挙なるものが行われる。船内の講座でも各政党の実際のマニフェストの読み解きが行われる。さらにマニフェストを船内の共通エリアに掲示をして実際に投票が行われる。この船の思想的なことは以前も書いたので何となく結果は想像できるが、企画としては面白い。

結果は、以下のとおりである。自民：48、公明：17、民進：82、共産：107、維新：25、社民：41、生活：26、日本のこころ：8、改革：3、無効票：10という結果である。投票数367、投票率は46%、ちなみに私は投票には行っていない。そしてコメントはやめておこう。

今日は朝から買い込んだお土産物の確認をする。買ったお土産は予想を超えて数もカサも多くなってしまいスーツケースに入り切らないと思われるので、どのくらい溢れるのかを調べる必要がある。案の定かなり溢れる。大きめの段ボール1個分は明らかに足りない。

出航時には荷物は自宅から船室へ直送できたが、帰りは下船して入国審査後に自宅まで送れる。したがって帰港が近づくと船内で段ボールの販売が行われるようになっている。しかし、今後の旅行にも使用するので段ボールよりもスーツケースの方が良い。ホノルルで安く良いスーツケースを購入する心づもりができた。

太陽が真上に来る現象になる日である。インド洋でも経験したが太陽が真上から照らすので影

が無くなる。インド洋では完全という訳にはいかなかったのでリベンジである。

テーブルに置いた缶ビールにはどの角度からみてもほとんど影がでていない。明らかにインド洋の時よりも完成度は高い。

ビールはその確認用に買ったわけでもないが、とにかく乾杯する。



■ 33年ぶりのホノルル

ハワイのホノルル港に寄港する。今回のクルーズ最後の寄港地になる。ホノルルは2度目の訪問であるが、前は結婚して1年くらい経った時で実に33年ぶりである。昔、両親や叔父叔母が30年くらい前の話をしていたのを思い出す。そんな昔のことを言っても訳が分からないよと困惑したことを子供の頃に思っていたが、今まさに同じことをこの船の若者に話をしている自分に気が付く。

ホノルル港からアラモアナショッピングセンターまで歩いて1時間弱、高層ビルが立ち並び、さらに建設中のビルも多い。広い道路に緑の公園、そして青い海という基本的な街のつくりは昔から変わっていない。つまりきれいでゆったりしているという印象はそのままである。

ホノルルは地下鉄や路面電車が無いので交通手段は The-Bus と呼ばれるバス網が便利だ。一回2.5ドルで乗れる。乗車口でお金を払うとトランスファーチケットを運転手がくれる。このチケットがあれば、その後2時間くらいまでに乗車する費用は掛からない仕組みになっている。ただし日本のバスのようにおつりが出ないので友人が3ドルを入れて取られ損になってしまう。運転手は釣りが出ないのは常識であるという強い態度でモノを言っている。

このトランスファーチケットはヨーロッパの国々で採用されているあの性善説交通システムを思い出す。確かチケットを買ったら90分程度は乗り放題でチケットを見せる必要はない。ここホノルルでは見せる必要はあるが乗り換えや簡単な往復には便利である。このシステムの便利な点は距離によって料金を変える必要がない。

各国それぞれに国民性やお国事情でこの交通システムには差がある。

■ ダイヤモンドヘッド登山

今回はダイヤモンドヘッドに登るという目的がある。船で知り合った飲み友達に話すとあれよあれよという間に10人くらいの団体ツアーになっている。これがこの船旅の一つの特徴かもしれない。次の寄港地はどこに行く予定かと聞き合っているうちに良ければ一緒に連れて行ってとい

う具合に賛同者が増えていく。

23 番バスでダイヤモンドヘッドの公園入口まで行き、ここから標高 232m の頂上までの登山である。既にバス停の標高 50m くらいはあり、残り 180m である。ただし問題は夏の日差しである。11 時ということでこれから暑くなる。したがって短パンにタンクトップ、サンダルという地元の若者や観光客が多い。そこに日本人の長ズボン、長袖、帽子とタオルという服装が参戦するので対症的で面白い。私たちはその中間の服装になっている。

多くの人達が登っている。ジグザグに登山道を登る光景はさながら富士登山のような感じである。1 時間ほどで登頂する。どんな小さな山でも頂上はやはり気持ち良い。そして風が通り抜けるので涼しい。ホノルルの街が一望でき、きれいな街並みや海岸線も見ることができる。



ダイヤモンドヘッドは別名ダイヤモンドヘッド・ザ・クレーターと呼ばれており、大きなクレーターになっていて外輪山の一番高いところが頂上と称されている私たちが今立っている山である。軍事上の拠点だったので、頂上にはその痕跡がある。

外輪山のあちらこちらに砲台があり、この山頂の軍事拠点はそれら砲台からの砲撃をコントロールする攻撃統制所になっている。海や港や街や山も 360 度見渡せる場所なので、敵の位置などの砲撃目標を三角測量して知らせるためのものである。

4 階層からなる攻撃統制所は各階からは細長い窓で眼下を見ることができる。屋根の部分は噴石を埋め込んだコンクリートでカムフラージュされているので、一見したら山の岩に見えて上空からみても発見は難しいそうである。

日本や世界のいろいろなところを旅しているとこのような見晴らしの良い場所というのは必ず軍事的利用がされている。

■ワイキキ

下山してタクシーでワイキキまで移動する。予約はしていないが評判の良いレストランで美味しいステーキを食べることも今日の目的になっている。早速 T ボーンステーキを 2 皿注文する。その T ボーンステーキは一皿 4 人前くらいあるのでみんなでシェアして食べるのにはちょうど良いと言うのは店の日系ウェイターの話である。

一皿 23000 円ということで値段も良いが、これが実に旨い。柔らかさや食感も良いし味付けも抜群である。ミディアム・レアの焼き加減も良く、味付けは塩コショウの素朴な味がとても良い。私はそれで充分堪能しているが、日本人向けにワサビ醤油も出てくる。これも結構いける。

大げさに言えばこんなに旨いステーキは今までの人生では味わったことがない。船旅の終わりも近づき、ハワイならばステーキという発想が良かったのかもしれない。その発想は居酒屋友達のHさんであり、いつもヒョウヒョウとしているが良い感性をしている。

出費はビール、サラダ、パンやチップを含め一人 7000 円となったが、お腹も思い出もいっぱいになったので大満足の昼食となる。感謝、感謝である。



昼食後は 33 年ぶりのワイキキビーチを歩く。昔の記憶があまりないので比較するのが難しいが、もう少し広がったような気がする。絶え間ない発展をしているので最終的には海岸の砂浜が減っているのかもしれない。

ドン・キホーテが近くにあり、お土産とスーツケースを買う。スーツケースは増えた土産物のためにここハワイで購入を決めていた。

問題はこのスーツケースを持ってトランスファーチケットでバスに乗り込むと、運転手からスーツケースの持ち込みを拒否される。理由がよくわからないがあまりに大きいので邪魔になるからか、危険物の類の持ち込みを禁じているのかわからない。結局夕暮れの海岸通りを大きなスーツケースを持って 1 時間ほど船まで歩くことになる。夕陽がまぶしいがもう昼間の太陽光ではなく、風もさわやかであり苦にはならない。

帰船して、レストランや居酒屋のアルコールメニューは缶ビールと少額な飲み物に限定されていることにまた驚く。これもまたアメリカ合衆国当局からの指示ということである。イギリスなどでもあったがアメリカ合衆国よ、お前もか。この富める国が何を言わんかである。

■ オアフ島一周 2.5 ドル

私たち夫婦と居酒屋仲間のYさん、おかんの 4 名でオアフ島の北部のノース・ショア地区にバスで行くことにする。何しろ 2.5 ドルでいける。うまくいくと帰路もトランスファーチケットに乗ればオアフ島一周が 2.5 ドルで済んでしまう。

ホノルルからオアフ島のほぼ真ん中を北部のハレイワという町まで 52 番のバスで約 1 時間半以上かけて行く。最初はホノルルの渋滞の中をバスは走っていたが、だんだんと郊外になって途中は高速道路も使用してのバスの旅になる。

乗り合いバスなのトイレ休憩がある訳でもなく、バスのシートも 1 時間以上の旅には不向きな硬いものである。ついでに言うと冷房も異常に効いている住民のちょい乗りの乗り物である。

車椅子の乗客が乗って来たら、運転手が席を立て既に座っている何人かの乗客をどかしてバスの椅子をたたんで車椅子スペースを確保し始める。そして車椅子の人を中に入れると運転手がその車椅子を固定するために鎖のようなものでロックしている。慣れた手つきであり、まわりの乗客や車椅子の乗客も助け合いながら全く違和感がない。

日本ではバスの運転手はそこまではやらないからその行為はとても新鮮に映る。30分も走行して車椅子の乗客が降りる際も運転手が車椅子のロックを外して同じ光景を見る。

自転車も積み込むことができる。バスの前の部分に自転車2台分が横に装着できる金具がついている。乗客は運転手に言って自分で自転車を持ち上げてその金具に載せる。その間当然バスは停車しており、運転手は運転席でその作業を見ている。多分別に料金がかかるかもしれないが、私の見ているかぎりその確認はできなかった。

ハレイワ・ビーチに到着する。1時間40分というはずが2時間に近い時間になっている。ビーチはエメラルドグリーンでとてもきれいである。今はもう夏休みに入っているので家族連れで海水浴を楽しむという日本でもよくある光景ではある。

きれいな海水浴をする海はこの船旅で回った国々でもたくさん見てきたが、海はきれいだが街は汚い。そうアジアやラテンアメリカの国々である。ここアメリカ合衆国は世界一の国であり暮らしが豊かなので街もきれいである。

時間が止まったような南国独特ののんびりした雰囲気がこの地区にはある。オアフ島はホノルルという大都会もあるが、北側はそんな田舎街になっている。

この田舎のあるレストランに入る。昨日のステーキは無理にしても今日も何か旨いものを食べたいという欲求がある。妻は33年前にオアフ島一周したときに島の北側でピザを食べたと言いだした。このレストランの看板にはピザとコールドビールと書かれており、そんなこともありこのレストランを選んだが、これが正解であることに気が付く。

ミックスピザとベジタブルピザとロコモコと呼ぶ料理を注文する。ピザはこんなところでは失礼だが、予想以上に旨い。それからロコモコはライスの上にハンバーグと半熟卵をのせて独特のソースをかけた地元料理でソースはハヤシライスのソースに似ている。料金はリーズナブルでビールも含めて2000円くらいである。またまた2日続けて満足な昼食となる。

レストランや食堂の他にセブンイレブンもあり、Tシャツや貝殻で作った民芸品のようなものを売る店が多く並んでいる。日本の田舎の海水浴場の集落のようである。

そんな中で一軒行列ができていいる店がある。水着姿の若い女の子が中心に並んでいる。マツモトというシェービング・アイスの店である。

日本語でかき氷といった方が分かりやすい。氷を削ることをシェービングと訳したようだ。日本のかき氷を少し丸く固めてその上にミルクや抹茶のトッピングをしている。日系の松本さんが始めたという店のようで、先代の写真が飾ってあり、現在の店主もその写真に似ている人で店にでている。

この店がひととき賑わいを見せている。このようにヒット商品が出ると他の同業者がその恩恵に与ろうとしてあちこちで二番煎じが始まるのが常で、歴史を重ねて古くなると必ず本家や元祖ということになる。幸いにしてまだこの同業者は現れていないようである。

帰りは大回りになるが島の東側の海岸を走る 55 番のバスに乗ることにする。2 時間 30 分ということだが、もう少しかかりそうである。ビールを結構飲んだので長時間のバス旅はつらいが、何とかなるだろうとトランスファーチケットを見せてバスに飛び乗る。朝チケットを買ってからすでに 3 時間くらい経過している。でも 2 時間のトランスファーチケットというのは運転手の自由裁量のようなものである。結局オアフ島一周乗り合いバスの旅は 2.5 ドルで達成される。

そして偶然がまた起きる。ホノルル郊外でテニスをやっていたはずの居酒屋仲間の G 姉さんがバスに乗ってきた。何百台も走っているバスのその一台で偶然会うとは、旅は偶然の連続である。

彼女は姉さんといっても私よりも年上だからおばさんか、いや年上だから姉さんでいいのか。そうか、船のおばさん、おばあさんたちもみんな姉さんでいいのだ。便利な言葉を再発見する。

■最後の出港

本日はアメリカ合衆国を出て日本に向かう最後の出港になる。今回の地球一周の船旅ではここアメリカ合衆国に立ち寄ったので、その国民はここで下船しなくてはならないという。アメリカ合衆国を経由して別の国に行くことができないらしい。そのような法律があるのか、この船だけに当局からの指示なのかは分からないが、本日の出港にはアメリカ合衆国国籍の人はいない。

今になって思うのは英会話の先生たちも USA 出身者がほとんどいないという状況だったのが納得する。だから一応母国語にはしているが、シンガポールやカナダ、オーストラリア人が多い。通訳の女の子に聞くと英会話の先生たちはそのお国訛りに富んでいるという。

帰船時刻のリミットが 20 時で、通常はその後 30 分くらいしてから出航式が行われる。ところがまた要注意の船内放送、〇〇さんいらっしゃったらレセプションに連絡下さいというのが流れる。前回もそうで〇〇さんは帰船していない可能性がある。

21 時になってもスタッフがあちこち探している。デッキから下を見下ろすと船に乗り込むタラップのようなものはまだ外されないでそのままになっている。したがってロープもしっかりと船と岸壁を結んだままである。またまた人騒がせな人が帰船リミットに間に合わずに街をうろついているのか。

出航式は 21 時頃から始まり、最後の出港式なのでシャンパンがみんなに配られている。しかしいつになっても乾杯にならない。明らかに人を待っているようで、シャンパンは完全に温まってしまっている。

22 時に近づいてきてスーツケースを持ってスタッフらしき人が船から降りる。それでも誰かを待っている様子である。22 時にタラップが離れて、出航式の乾杯がようやく始まる。スタッフらしき人はおそらくはまだ船に戻ってきていない。きっと〇〇さんのパスポートをもって居残りになったのだろう。

出航式にはドラを鳴らして会場を一周している人がいる。司会の紹介では先日のエル・システムのチャリティーオークションで出航式のドラを鳴らす権利を買った人である。楽しそうにドラを鳴らし続けている。あの幸せそうな顔を見ると安い買い物だったかもしれない。

そして出航式で 2 曲リクエストできる権利というものもあったが、憧れのハワイ航路が流れている。そのリクエスト曲という。もう一曲は自分のオリジナル曲の披露という。この人はそれが歌

いたかったのかもしれない。これも思い出という意味では安い買い物かもしれない。

最後の出港式を終えて、いよいよ太平洋の10日間のラスト航海になる。あと10日間でこの旅は終わりかという半面、普通は海外旅行といえは10日間くらいなので、10日間もあればこれから始まるという視点もある。

人間にとっては時間というのはやはり可変なのである。気持ちの持ち方で長くも短くもなる。

第三章 太平洋～日本

■スクリュー停止

太平洋は穏やかで、船は北西に進路をとってゆっくりと航行している。居酒屋仲間でフェアウェルパーティなるものを内輪で開催する。

場所はいつものように後部デッキにあるパナラマバーで居酒屋波への隣になるが、この二つの飲み屋は会計もどちらでもOKで、飲み物はパナラマバーからでるが、おつまみは居酒屋からでるので一体運営といったほうが良いかもしれない。したがってここで飲んでいると天候や波の状況がよくわかる。

そんな中、船が泊まっているのに気が付く。スクリューが回っておらず、航跡が見えない。船は太平洋に浮かんでいるという状態だ。ただし船内の電気はついているので発電機は動いている。船を意図的に泊めているかもしれないが、頭をよぎったのは漂流という二文字である。

この船ではないがピースボートの以前の船では故障で2回ほど漂流騒ぎがあったことをネットで見たとある。その時に乗っていた人からサウナで事情を聞いたことがある。

船が故障して動かなくなり代わりの船が来るまで20日間ほどアフリカで自由行動になったことと、インド洋かどこかでエンジンが停止して3日間ほど漂流した。この時は発電機も動かないので電気が止まり、エアコンや冷蔵庫も停止したので大変だったらしい。

船は何とか1時間ほどしてからまた動き始める。そして航跡が復活する。とりあえず良かったと、またみんな飲みなおす。

飲みながらの話はといえばやはり今回の地球一周クルーズのこと、船のこと、スタッフのことなどに及ぶ。

通訳の女の子と話す。彼女の人間関係が国際色豊かなことに驚く。両親は日本人であるが母親はパリに住んでいる。ボーイフレンドは台湾人の血が1/4入っている日本人で、彼とは日本語でも話をするが、英語と中国語が話せる。そして彼女は今度スペイン語でも勉強しようかと話している。

この船を降りたら、海外に渡り、その国と日本の架け橋になるような機関で働きながら、翻訳の仕事も始めたいという。

この船にはもう乗らないのかという質問には、もう乗らないと即座に返事が返ってくる。どうもこの船のスタッフをあまり評価していないらしい。スタッフの責任感やスキルに問題を感じて

いるように思える。彼女の3カ月間の素直な感想である。

■クルージング日和

天気もよいのでクルージング日和である。プールサイドの日よけ傘の下にあるベッドに横になって本を読んでいるとエル・システマの若い女の子たちが水着で現れる。もちろんプールに入るために水着を着てきたのだから珍しくはないが、彼女たちのその体に驚いている。

このプールでよく見かけていた日本人の貧弱な体（失礼）に比べてボリューム感があるので、びっくりしているのが正直な気持ちである。こんな時には目のやり場が無いというが、私の手元には本があるので目のやり場は本である。ただ、本の字面は追わずに彼女たちを追っている。

余談ではなるがベネズエラの女性がミス・インターナショナルなどの美女コンテストで優勝することが多いという。理由はその体系である。

国際外洋クルーズ船に乗っていることを実感する楽しい昼前のひと時になる。

私がプールサイドで本を読んでいる間、妻は英会話の無料の公開講座に行っていたようで、その流れで英会話の先生や通訳の女の子、何人かの日本人女性で昼食を一緒にとったという。

通訳の女の子は私の居酒屋仲間なので、妻もよく知っている。英会話の先生もスコットランド出身の女性で、さながら昼の女子会になったようである。

妻の話では、今まで出会った有名人は誰かなどという他愛ないものだったという。ハリーポッターの作者や俳優の竹ノ内豊が出てきて、妻は女優の中村玉緒と答えたという。

この女子会、適度に英語で難しいところは同時通訳してくれるので会話がはずんで楽しかったらしい。だんだんと国際的になっていく。

私が出会った有名人は誰だろうかと、すぐに浮かんではこない。松下幸之助かもしれない。

■最後の英会話教室

英会話教室は本日がラストレッスンになる。最後の日なので一人ひとりがクラスメイトに向けて2分間スピーチを行い、聞いているクラスメイトがコメントをするという授業になる。

私はこの船旅を振り返るという内容で話をする。一番驚いた出来事は、海賊対策で自衛艦に守られたこと、一番の夜は、南十字星と北極星を同時に見ることができたこと、そして一番の国はどこだったかを話す。

私はノルウェーを選び、その理由も説明する。フィヨルドと大自然、看板のないきれいな街、裕福でアクセクしない人々、そして水力発電100%のエネルギー政策をいう。

そんなことを話しているところの英会話教室での出来事も思い出してくる。クラスメイトがみんな英語ペラペラに見えて落ち込んだことや、昔は当然知っていた簡単な単語が出てこないことが浮かんでくる。

授業のパターンでいうと、最初のうちはこれから行く国々で一番見たいものは、一番食べたいものは、そして途中からは今まで行った国々でどこが良かったか、何が美味しかったか、どの国のカルチャーに驚いたかという内容の授業が多かったことを思い出す。

もしも無人島に持って行くのならば、好きな音楽は何、好きな映画は何という授業もあった。自分の感性や理性でベストの事柄は何で、それは何故という授業内容が多い。そもそも日本語で

もあまりうまく答えられない。だからまず日本語で考えてから英語に訳して話すという作業になるので、ワンテンポ遅れてしまう。

ビブリオバトルでも自分のおすすめの本は何か、そしてその理由という、そもそもそのようなことを日常的にあまり考えていないことに気が付くことが多かった。

これから日本に帰るまで、あるいは帰ってからでもいいけれどリストをつくっておこうと思う。好きな本、偉人、食べ物、映画、歌、俳優、温泉・・・そしてその理由というリストをつくって、埋められない部分はネットや図書館、そして体験で埋めていくようにしよう。

最後の授業を終えて、みんなで4階のレストランに行こうとなり、26才のカナダ人先生を囲んで、彼の両親くらいのおじさんおばさんたちで夕食となる。だいぶ英語でしゃべりながら食べるのにも慣れてきた。英語がしゃべるようになったわけではないが、気後れしなくなったというのが実のところかもしれない。

カナダ人の彼はうまく箸を使って和食を食べている。それなりには上手なのだが、中指が箸と箸の間に入っていないのが残念である。ワンポイントレッスンをしてあげる。いつもとは逆の立場になるもの面白い。

日本人でも上手く箸が使えない人を時々見かけることがある。箸の持ち方しかり、着物や浴衣の着方しかりで日本人ならば最低限のレベルにないと恥ずかしいと感じる。それは外国人と生活をする中で痛切に感じる。日本の歴史や文化の紹介、日本の経済、科学、政治の現状を最低限でいいから基本部分を語ることも必要かもしれない。

食事が終わりコーヒーを待っている間に、この26才はカードマジックを見せてくれる。実に上手い。プロのようなレベルである。いやプロはもっとすごいのだろうが、十分に堪能させてくれる。おばさんたちは、何故、どうしてそうなのと質問しきりで、彼はシークレットという。

本業の他にちょっとしたかくし芸的なものができるとどんなに良いのだろうとここでもつくづく感じてしまう。

■ ピアノバー

夜は友人たちとピアノバーで一杯いただく。ピアノの生演奏を毎晩行っているところで、バーの中央にグランドピアノが置いてあり、そのピアノを囲むように15人くらい座れる丸いカウンター席がある。その他にも4人掛けくらいの小さなテーブルが10くらい配置されている。

比較的個人まりとしたバーで、黒を基調にした落ち着いた雰囲気がある。ただピアノバーというくらいなので、各テーブルや壁にはピアノの鍵盤が装飾されており、これが独特の雰囲気をかもしだしている。

ピアニストはウクライナ人で60才から70才くらいのちょっと太ったおじさんで、彼の年齢からして古い歌を中心にレパートリーは相当の数ありそうだ。

ピアノの生演奏というのもたまには悪くない。悪くないではなく大変良い。比較的ポピュラーな曲を弾いてくれて、上を向いて歩こうをリクエストする。

永六輔の訃報を聞いたのが一週間ほど前になるが、このピアニストは永六輔を知っているとは思えない。きっとすき焼きソングとして認識しているのだろう。

ビートルズをリクエストしたら、Yesterday と And I love her を弾いてくれた。ビートルズも

結成から既に 50 年ということで古典の領域になりそうである。

この船の専属バンドのフィリピン人女性ボーカルがお客として現れる。日本人の常連客が何やら歌ってくれと頼んでいるので、ピアノ演奏で一曲コラボすることになったようでプラターズの名曲 **Only you** を歌い始める。さすがにプロは歌がうまい。日本人歌手に比べて特に英語の発音がうまく感じる。

ウクライナ人のピアノ生演奏にフィリピン人の歌手の歌声を、太平洋上で聞けるとは思ってもいなかった。

60 代後半くらいの太ったおじさんピアニストが演奏してくれるが、このピアニストの年齢を 4 人で当てることになる。私は 68 才、妻は 72 才、O さんは 63 才、K ちゃんは 67 才と見立てている。後日年齢を聞いてみよう。

■日本一周

共有スペースでパソコンをたたいていると、若い女の子が同じテーブルに座ってきたので、思わず声をかけてしまう。実は彼女が日本一周旅行をしたことを紹介する自主企画をしていたので知っていた。乗船当初には夕食の同じテーブルで温泉の話をしたことを彼女の方も覚えていてくれて早速いろいろな旅の話になる。

彼女は 2 年くらい前に 50 日間かけて自家用車で日本一周したという。ちょうど私も 40 年前の大学 2 年生つまり 20 才の時に仲間と 50 日間かけて日本一周をしたので 40 年の時を超えて昔の自分に会うような不思議な気分になる。

彼女の日本一周の基本ポリシーは 1 日 1 万円、1 日 1 県、高速道路は使わないというもので、現在私が企画している日本一周旅行の基本の考え方に近い。

彼女も会社を辞めてこの船に乗ってきており、下船すると無職なので、これからのことを考えないといけないという。そういう女性客は多い。せっかく旅行が好きならば旅行関係の起業をしたらどうかなどと余計なおせっかいをする。

■マルクス経済学ですか

友人に誘われるまま講座に行く。社会の仕組みが私たちをつくるというサブタイトルで、経済と貧困をテーマにマルクスについての講座である。

この船のスタッフが開講していて行ってみると若者中心に 25 人くらい集まっている。マルクス経済学という言葉は 40 年前の私の大学生時代でもすでに死語となっていて、ここでまた聞くとは思わなかった。

昨今の若者がワーキングプアーなどと呼ばれたり、非正規労働者が多くなっていたりでまたマルクス経済学が脚光を浴びてきたのかと思ったが、どうも違うらしい。

集まっている若者は仕事を辞めてこの船に乗ってきた人が多いので、現実社会である程度の収入の得られる仕事に就くことに興味はあるようだが、マルクス経済学に興味を持っている人はいないかもしれない。

そもそも開講しているスタッフはマルクス経済学をどれくらい知っているのか、そして何故それが死語になっていったのか聞いてみたいが、それを抑えてしばらく講義を聞く。

結局、この講座は何が言いたいのかわからないまま、誘ったくれた友人と顔を見合わせた。

■オークションで買ったもの

夕食時に英会話教室のクラスメイトのおじさんを見かける。船長、事務局長、クルーズディレクターとディナーをしている。先日行われたチャリティーオークションでその権利を1万円で買ったそうだ。

彼は78才であるが、そういう先進性というかバイタリティーみたいなものがある。だから自主企画で詩吟とギターの弾き語りをしている。それでいて茶目っ気もあるので、おばさんたちには人気がある。

あんなふうにな年をとりたいと思わせてくれる人である。

もう一つ、チャリティーオークションで権利の情報が入る。乗客1000人分の食事をつくる厨房見学ツアーに行った人からの情報である。

食事のパンやティータイムに出てくるクッキーは毎日焼いているという。ヨーグルトは残念ながら自家製ではなく保存品を出している。

106日間のメニューは乗船前にほとんど全て決まっており、それに応じて寄港地で補給している。それはそうだろう1000人分の食事なのだから行き当たりばったりという訳にはいかないだろう。

■消滅日

今日は時差調整日になっており明日の朝起きると7月19日になる。だからこの船では7月18日は消滅する。106日間地球一周の旅は、乗っている我々にとっては105日間になる。

今まで時差調整日には1時間多くなるので、その分で飲んだり朝寝したり、少しずつ得をしていたが、そのつけを一気に払うことになる。

ただこの消滅日、乗客の中では勘違いしている人が多くいる。毎回時差調整日は就寝前か夜中の24時になったら23時に時計を戻してくれとっており、この23時から24時の1時間を消滅する7月18日という解釈をして船内イベントが開かれる。だから乗客はこの戻した1時間を7月18日だと思い込んでいる人が多い。

本船が日付変更線を通るのは7月18日の朝の4時頃である。厳密には7月18日は0時から4時まで存在していて、日付変更線を通って次のタイムゾーンに移った時点で7月19日の朝3時になる。だから別に7月18日は消滅しているのではなく、今回の航海では4時間存在している。

■旅もあと一週間

いままで日本時間よりもマイナス20時間という表現を使用していたが、日付変更線を越えたのでプラス3時間の時差になる。つまり日本よりも3時間早く一日が始まる。

季節外れの餅つきが9階デッキで行われる。今までいろいろなイベントが催されているが炎天

下の餅つきなどというものはあまり聞いたことがない。ネタ切れ感が何となく漂う。

残り少ない船上生活に対していろいろなところで締めくくりイベントがある。

まずは英会話教室でのスピーチフェスティバルである。私はエントリーしていないが、2 分間の英語スピーチである。1 カ月くらい前からみんな必死に原稿を書いて先生のチェックを受けてこの日に望んでいる。

生徒だけがスピーチをするのではなく、英会話の先生が日本語でスピーチをするというのも混ざっている。もちろん全員ではないが、中には面白いテーマのものもある。

数字で旅を振り返るといふ。寄港した国が 23、港が 24、330 人と話をして、35 回の講座をして、毎日 88 回の階段をのぼり朝食にいったとか・・・。

目の付け所が面白い。残念ながら私にはこんな発想はできない。

私がエントリーしなかった理由は落語の公演と重なるから練習時間からして無理だろうと踏んだからであるが、実は落語は練習時間が不足して自主公演を断念している。

自分の不甲斐無さにあきれているのと、人間は自主性ばかりではだめになるといういい経験になる。

水彩画教室の作品展示会も開かれている。これも中間展示を行ったが今回が最終展示である。なかなかの出来栄の作品も目に留まる。

船内写真展も開催されていて、これも 2 度目の開催になる。この写真展を見ているとやはり私のカメラが壊れたことは悔やまれる。

自主企画発表会なるものが開催される。太鼓、歌、踊り、朗読など様々なジャンルの自主企画の集大成というから期待できるといえばそうだが、町内会のイベントと言えはそんな感じもしないではない。

会話教室のクラスメイトがヒップホップダンスと詩吟に出演するので、応援がてら写真撮影にのぞむ。

連日のように締めくくりイベントがあり、社交ダンスの発表会が開催される。船旅といえば社交ダンスは定番である。私も学生時代にはダンスパーティーに盛んに行っていたのが懐かしい。

少しのぞいてみると、中高年ばかりであるが 80 人くらいの受講生がいろいろなダンスを踊っている。外洋クルーズ船らしくて良い雰囲気である。

■さまざまな情報

サウナの常連が 4 人部屋から 1 人部屋に移った。理由は寄港地で買った酒類は、船室には持ち込まずに一度船に預けることになっていて、この時期になるとそれらが返却される。各自でパッキングし持ち帰るためである。

何故船室に持ち込めないかという、船室での飲酒が禁じており表向きは安全上の理由という。部屋飲みが安全上問題あるか否かは疑問ではあるが、とにかく没収されているのが返ってくる。

問題はその本数で、彼の場合は 130 本ほどあるというからすごい。とても 4 人部屋の空間に収

まらないというのが理由の一つである。

あとはこの時期になると、あちらこちらでカップルが出来上がっており、二人の空間が欲しいという理由もある。それは若い人だけではなく、年配カップルもいるだろう。

4人部屋から一人部屋への変更費用は1日あたり2万円という。

サウナではいろいろな情報が入る。

一週間くらい前にまた1名クルーが船から落ちて亡くなったという。だからその後クルーたちが喪章をつけて、半旗が掲げられているという。残念ながら私はその喪章や半旗の光景を見ていない。

確かに一週間くらい前に船が1時間くらい停止した。あの時にクルーが落ちて亡くなったのだということであろう。ただこれは多分誤認情報であろう。

それは居酒屋仲間のヨットマンYさんの見解で、エンジンが停止しても航跡は曲がっていないから救助に向かった形跡がない。もし本当に海に落ちたなら、少なくとも数時間は人命救助を続けないと船長の責任問題になるという。おっしゃる通りであろう。

84才のおじいさんがサウナに入ってくる。常連の知り合いらしく、いろいろ話始める。といつてもおじいさんは耳が少し遠いのであまり会話にならない。

3人部屋で残り2人とうまくいっておらず、当初からケンカ状態という。だからこのおじいさんは每晚12時まで部屋にも戻らずに共有スペースでうろうろしており、同室の2人が寝てから部屋に戻りベッドにはいるという。84才のおじいさんに向かって大人げないとは言えないが、人間関係は難しい。

またまた、とんでもないニュースを聞く。昨日売店でおばあさんが倒れて医務室へ担架で運ばれたという。そして亡くなったという話である。担架で運ばれたところまでは目撃者もいて事実らしいが、亡くなったという点はどうも疑わしい。

北極オーバークランドツアーの参加者全員の荷物が戻らないという状態であったが理由が判明した。パリからベネズエラへ行く飛行機だったので、麻薬の検査で引っかかったらしい。

この船から乗った日本人はそんなことはないだろうが、どうやら別の国の乗客が原因らしい。とんだとばっかりである。南米ベネズエラということを改めて認識してしまう。

■卒業式

英会話教室の卒業式と卒業記念パーティがある。約100人の受講生に対して卒業証書を授与する式典である。事前に友人の出席者にどんな服装で行くのか聞いてみると、やはり卒業式だから正装か準正装という答えが返ってきたので、私もネクタイにジャケットという姿で参加する。

ここでも非常識の人が1割くらいいて、短パンにTシャツ、ジーパン、ジャージの半ズボンという姿で現れる。中には慌てて着替えに戻ったおじいさんもいるが、そのまま場違いな服装で卒業証書をもたらっていく。

3カ月前の定年退職時に定年式という式典が会社であったが、卒業証書をもたらうのは実に37年

ぶりになる。しかし学業優秀でもないのに留年もなく実におめでたい。中高年が多い卒業生たちは、またまた青春を楽しんでいるという卒業式になる。

卒業証書授与の後は、記念撮影であるが、あの黒い四角い帽子をかぶっての記念撮影は何だか感動してしまう。生まれて初めてかぶった帽子になる。

夜は卒業記念パーティになり、今度は浴衣を着て参加する。3 カ月半の間に苦楽を共にしたクラスメイトや先生ともこれでお別れになる。みんな良い人達で良かった。英語は上達したかどうか分からないが、振り返れば思い出に残る時間を過ごしたことは感謝である。

26 才のカナダ人の先生が一番若く、そして 20 代の女の子がいるが、あとは皆、私よりも年上のクラスメイトたちではある。でも英語は皆、私よりはうまく話せるからうらやましい。

■ハプニングと演出

帰国説明会で横浜と神戸での下船の手続き説明とスタッフからの御礼挨拶になる。

問題は最後のところで起きた。一人の男性がステージに上がってきて、マイクを貸せと言っている。何かを聞きたいということでスタッフともめている。そんな時にまた別の一人の男性が後ろの方からマイクを渡せ、好きに言わせろと騒いでいる。

会場は騒然となり、会場のみんなどはステージに上がった男性とスタッフとのやり取りに注目している。1~2分もめていたが、何とか後で別途聞くからということで収まった。

ステージに上がった男性を私も知っている。あとで本人に聞いてみると、人が亡くなっているとかいろいろな噂話を聞くが、本当のところはどうなのかということを経験で聞いても何も答えてくれないので、公開の場で聞いてみようと思ったという。

その気持ちは分からないでもないが、公開の場ならばなおさら何も答えられないだろう。

夜は船長主催のフェアウェルパーティが開催される。ところが定刻の 17 時 30 分になっても何も始まらない。船長もいる、スタッフもいて何か話しているが 5 分経過しても始まらない。

最後の最後までこの船の悪いところの一つが露呈する。時間にルーズなのである。開場時間も開演時間も事前に告知しているのに定刻に始まらないのならば、その時点で説明がなされないといけない。

そんなことは数々のイベントで多く見かける。参加者が 5 人や 10 人ならともかく、何百人と人が集まっているのだからスタッフの対応は理解できない。

だからといって私がステージに上がって何か言うつもりはない。

フェアウェルディナーも開催される。ドレスコードはないが、おしゃれをしてきてくれと書いてあるが、場違いな姿の人もある。どうも常識が違うようである。

食事はというと 3 日間赤ワインで煮込んだ牛タンが出てくる。これは柔らかくて美味しい。

本日は特別の演出が用意されていた。メインディッシュが終わりデザートで出る前に手拍子に合わせてクルー全員が登場する。部屋の掃除、ベッドメイキングするハウスキーパー、コック、ウェイターなど総勢 200 人くらいがディナー会場に手拍子に合わせて行進して入場する。

責任者からの挨拶があり、クルー全員で We are the world を歌ってくれる。

歌が終わり、クルー全員が列をなして各テーブルをまわり退場する。いろいろなところでハイタッチや握手、ハグが行われている。ありがとう、Thank you の声が聞こえる。感激で泣いている乗客もいる。

何かとてもいい気分になる。クルーには私も感謝するところが多く、頭が下がる思いである。いきな演出に感謝、感謝である。

■帰国カウントダウン

本日はパッキングデーという荷造りの日になる。

地球一周の最終として全員が出演する映像を撮影するというイベントも本日举行される。テレビカメラを回しっぱなしにして 20 分間くらい船内を映像クルーが回るというもので、全員がどこかに参加してその映像に映るというものになる。

普通は船内生活というと何かのカルチャースクールに入ったり、朝のラジオ体操やノルディックウォーキングなど運動をしたりするので、それらのどこかの団体が集まっているところで撮影するという。私も英会話にするか、何にするか悩んだが、一番出席日数の多かった居酒屋「波へい」でその撮影をする。

穴場らしく数人しかいないので結果はバッチリで撮影される。これを編集して後日販売されるらしく、その予約もする。いろいろイベントを考えるものだと感心する。

夜、いつものように居酒屋に行く。スタッフの女の子と夫婦で飲む約束をしていたが、今日の居酒屋はお別れ会の予約で満席である。かろうじて 1 テーブルを確保して飲み始める。

彼女は人なつっこいので人気がある。独特のキャラクターの沖縄出身の 20 代である。私を知っているのは、この船に乗って落語を聞いたのが、彼女の人生で初めての生落語で大変感動したということで顔なじみになっている。

極寒キャンプの話をするとは是非行きたいという。誰もいない猪苗代湖畔で白鳥の声を聴きながらたき火とホットワインのキャンプは沖縄出身の彼女にとっては未体験ゾーンなのだろう。

いつものように延々と飲み会が続いていく。船に乗って船のプールで泳いだおかげで髪の毛が生えてきたという H さんがいつもように笑わせてくれる。沖縄出身の彼女の長い黒髪を使って H さんの髪にするというパフォーマンス、彼女が H さんの後ろにまわり背中合わせになって彼女の長い髪を H さんの髪の見立てるといふ、ある種「かつら二人羽織」をして笑わせてくれる。

夜も深まり、G ちゃんが彼女との破局を仲間に告げる。何故この時期なのか、あと 2 晩で帰国下船なのにととてもげせん話である。

■明日は帰国、最後の一日

昼食後のひと時を元アイドルの K ちゃんとブンヤの O さんと妻と私の 4 人で過ごす。

この船の英会話教室の先生の倍率が 10 倍以上あるという。船を降りたらカナダに語学留学をするという K ちゃんの情報である。100 人以上の応募に対して 10 人を選んだのだから先生としての教えるレベルや人格などは厳選されているはずである。

厳選したはずであるが人間いろいろタイプがあるので個性はさまざまである。先生たちは必ず

しも日本語ができるわけでもないのに、船内で日本語を教える人を募集しており、Kちゃんも韓国人の先生の日本語教師になった。まず女の子を口説く言葉を教えてくれという。あとにも先にもこの一回だけの日本語教師であったという。この韓国人先生はもっぱら女好きという評判になっている。

午後 2 時、最後のゴルフ打ちっ放しをする。帰港が間近になり、ゴルフの回数券の消化のためにここ数日は混んでいる。私も結局 20 回分の回数券を買い、本日が 20 回目となる。何とか消化することができ、ホットしている。

洋上ゴルフも打ち納めということで、最近ゴルフ担当になった 20 才のインドネシアのクルーの女の子に頼んで記念写真を撮ってもらおう。彼女は居酒屋のウエイトレスをしていたが、ローテーションでここに移った。居酒屋ではきっちり化粧をしていたが、ゴルフ担当になってからはあまり化粧をしていない。

夜、スタッフによるオールスタッフエンターテイメントショーがある。スタッフとひとくくりになっているが、英語・スペイン語会話教室の先生たち、通称 CC と呼ばれる通訳たち、ピースボートの事務局スタッフたちになる。

観客はもちろん乗客で、多くのスタッフたちとは既に 3 カ月半の旅で顔見知りを通り越して業務上の関係以上の仲間になっている。

基本的には素人のかくし芸大会のはずであるが、旅の終わりを迎える打ち上げと仲間意識によって予想以上に盛り上がる。

芸のレベルは高いというよりも見せ方をよく知っている。その意味でみんな芸達者である。例えば、けん玉という出し物がある。演技者二人でけん玉を音楽に合わせてただやり続けるのであるが、ステージで男二人が腕を組んで回って見せるなど、アイデアや間の取り方が上手い。

英語の歌は発音が良いのかうまく聞こえる。ドラム、フルート、ギター、ベース、ウクレレ、この人はこんな楽器ができるのかという驚きもたくさんある。チームプレイのダンスなどは忙しい時間内でよく集まって練習できたなと感心してしまう。

ショーが終わって出演者が出口で迎えてくれる。そして感動して泣く若い女の子たちやおばさんたちに混じって何人かの男性客も泣いている。一生懸命さが伝わってきたのと、やはり 105 日間の感動なのだろう。

■横浜帰港

7 月 26 日朝 4 時過ぎには浦賀水道、みんな早起きをしてデッキにでている。おはようという朝の挨拶とお別れの挨拶があちらこちらで聞こえてくる。

右舷に房総半島、左舷には三浦半島、前方に横浜ベイブリッジが見えてくる。この景色は私にとっては庭に戻ってきたような気分である。

ここで海の色の違いに気が付く。船が進むために海水をかき混ぜるので両舷に水泡ができるが、今まで見てきた世界のどの寄港地と比較しても明らかに汚い。今まで寄港するたびに海の色は青か、エメラルドグリーンであったが、ここ東京湾、横浜港は淡い茶色をしている。

確かに船から見える街並みはきれいだが、この海の色はいただけない。今までの 105 日間の航

海は、この日本の海の色と世界の違いを気づかせるための序章だったのかと言いたくなる。

比較の意味では、行きかう船の多さも圧倒的である。そのために衝突の危険を相手に知らせる汽笛を2回聞く。急な操舵により衝突回避行動をしている。

記念のため最後の晚餐ならぬ最後の朝食を写真におさめる。いよいよ下船になる。



横浜に降り立つと不思議なことに、今まで行った寄港地のような気分で街を見ている自分に気が付く。この街はきれいで落ち着きがある。でも何かが足りないような気分になる。

それは活気がないということかもしれない。道行く人々は大人も子供も無言で歩いている。人間の発するエネルギーを感じない。あの喧噪のアジア、話好きのヨーロッパ、目を輝かせていたラテンアメリカ、それらとは何かが違う。

日本文化とはわびさびの世界だから内に秘めるものなのかも知れないが、この感覚は少し不思議な感じである。言えることは 105 日で自分の感性が変化したのは間違いない。

第四章 帰国して

■数字で振り返る

この船旅を数字で振り返るとしよう。

日本にいる友人たちにとっては 106 日間だが、乗っていた私たちにとっては 1 日消滅しているので 105 日間である。その見返りに 1 日 25 時間の日が 24 回ある。

もっと正確にいうと 2 回は 30 分の時差調整だったので 24.5 時間の日が 2 回あり、さらに西ヨーロッパからバルト海まで東に進んだので 23 時間が 2 回、25 時間の日は 25 回あった。つまり 105 日のうち時差調整した日は 29 回になる。

寄港した国は 23 カ国、24 寄港地になる。ただし私たちは北キプロスにも徒歩で入国しているので正確には 24 カ国、24 寄港地である。

船の航海距離は 29343 海里、54343km になる。地球の外周つまり赤道が約 40000 km なので距離の面では地球一周分をこえている。

居酒屋への出勤率は 90%程度で 95 日くらいは通った。サウナは 55 回、ゴルフは 20 回通った。英会話教室の出席は、一回風邪で休んだので 34 回である。撮った写真は 5551 枚にのぼる。

気になる費用は夫婦二人の合計で約 480 万円である。この中には乗船料（早期割引適用）、チップ一式、オプションツアー費用、土産費用、船内の居酒屋やゴルフ・サウナ費用、英会話教室、海外旅行保険費用など全て含んでいる。私たち夫婦二人分の費用の詳細を載せる。

項目	内容	単価	員数	合計
旅行代金①				3564200
内訳	基本費用(6Fツインルーム)	2200000	2	4400000
	早期割引	-480000	2	-960000
	特別割引	-39500	2	-79000
	ポートチャージ	48600	2	97200
	チップ	53000	2	106000
OPツアー②				578000
内訳	キプロス ニコシア	12000	2	24000
	リスボン シントラ	17000	2	34000
	モンサンミッシェル	27000	2	54000
	サンクトペテルブルグ	25000	2	50000
	ベルゲン→フィヨルド	33000	2	66000
	ブルーラグーン	22000	2	44000
	プリンスエドワード島	18000	2	36000
	パナマ運河鉄道	23000	2	46000
	マヤ遺跡	78000	2	156000
	ベネズエラ カラカス	8000	2	16000
	ベネズエラ エル・システム	9000	2	18000
	ドーバー→ロンドン	17000	2	34000
その他費用③				657267
内訳	英語会話教室	100000	1	100000
	寄港時費用USDル	56790	1	56790
	寄港時費用ユーロ	40500	1	40500
	寄港時クレジットカード	93301	1	93301
	船内費用(居酒屋、サウナ等)	269896	1	269896
	海外旅行保険	96770	1	96770
①②③の総合計				4799467

■クルーに学ぶ

クルーには本当にお世話になったと思う。お世話になっただけでなく勉強になり、感動ももらう。つつい乗客の日本人たちと比べてしまう。遊びに来ている乗客と、働きに来ているクルーでは立場が違うとはいえ、それを越えたものを感じてしまう。

そんなクルーに聞いた話を忘れていたので書き留めておこう。

クルーの多くはインドネシア人でイスラム教徒である。船にはいろいろな宗教のクルーが乗っているがイスラム教だけ船内のクルーエリアに祭壇がある。通常はメッカに向かって祈るのであるが、船ではどちらがメッカなのかいつも変化するので分からない。

そこで特別に祭壇を設けてそこに向かって礼拝する。

ラマダンと呼ばれる断食月が 6 月 5 日から実施で 1 カ月間続いた。水は飲めるが昼間は食事をとれない。昼間というのは日の出から日の入りまでの間で、ついこの前まで昼が長かったので大変だったという。そうアイスランド付近は 4 時間しか夜が無いのでこの 4 時間しか食事ができな

かったという。

クルーはインドネシア人が多いが、フィリピン人やウクライナ人もいる。勤勉で働き者である。通常は母国語と英語、そして日本語も少しできる。

居酒屋からゴルフの担当になった女性クルーと話をした。日本語勉強中なので、片言の日本語と英語での会話になる。インドネシア語で書かれた日本語入門本を見せてもらう。漢字とひらがなの日本文の下にローマ字とインドネシア語の表記がある。漢字はほとんど読めないというので読み書きではなく会話中心に乗客と話して覚えるようである。

インドネシアでは小学校から英語を教えていて彼女は普通にインドネシア語とジャワ語、そして英語が話せる。それに引きかえ私は中学高校大学と英語を勉強していたが、この差は一体何だろう。

極めつけは、私が尊敬する6カ国堪能なインドネシアのクルーの話である。

彼は現在33才、帰国後にイチジクの農園を開くという。何故イチジクなのかという素朴な問いに、イチジクはビタミンいっぱい健康に良い、葉っぱもお茶として飲める。生のフルーツでも、ジャムでも、ドライフルーツでも食べられる。そしてイチジクはインドネシアにはあまり入っていないので競争相手が少ないという。

24才の時に建築関係の会社をおこして、15人くらい使っていたという。ところがジャワ島の地震で津波によって会社も家も無くなった。その後日本やってきて建築関係の仕事に従事して、溶接やフォークリフトなどの資格を取って、日本語も勉強したという。

現在この船のウェイターの仕事をしており、給料を聞いたら月に7万円、チップが2万円で合計9万円の収入だが、インドネシアにしては良いらしい。

インドネシアで生活するには4~5万円あればよく、学校をでて初任給もそのくらいという。本当に稼ごうとすれば、日本に来て働いた方が収入になる。以前勤めていた会社からのいつでも雇ってくれると言われていたという。

驚くことがもうひとつ、彼は現在インドネシアで鳥を飼っている。正確には彼が飼っているのではなく、人を雇って鳥の世話を頼んでいる。卵を産んでヒナにかえたら、そのヒナを販売している。インターネットで彼が注文を受けて、メールで世話をしている人に指示をして発送するというビジネスを展開中であるというから驚く。その月収は3万円ほどあるという。雇っている費用は月12000円ほどという。

こいつはすごい若者、いや経営者である。同年代の日本の若者もこの船には乗っているが、全く異質な世界を感じてしまう。日本は大丈夫か。

クルーを通してこの船の生活を見ると、また別の日本が見えてくる気がする。

■修理しながらの航海

サウナ情報で面白い話を聞いた。夜中に寝ていたら浸水してきたという。スリッパが浮かんできて、船が沈むのかと思ったという。よく見ると洗面所付近のパイプからの水漏れで、廊下にも他の部屋には水はでていない。

下に置いた荷物は水に浸かり、スーツケースに入れていたものはスーツケースが浮かんでいる

ので問題なかったという。同室のもう一人は段ボールに入れていたのでしっかりと浸かってしまったという。

この部屋は水漏れの修理と部屋のカーペットの乾燥を行うのですがすぐに別の部屋に移ってくれというので部屋を代えたが、修理、補修には一週間くらいかかったという。

この船は船齢 40 年くらいの老朽船であるが、ドックに入ることなく船は働き詰めである。人間に例えると多少風邪をひいても薬を飲みながら仕事をしている熟年社員のようなものである。

従って、いたるところで修理や補修をしながら航海をしている。木製デッキの甲板の部分交換作業、ペンキ塗り、避難ボートの点検修理など様々である。

居酒屋仲間の Y さんはカメラの趣味があり、修理や補修をするクルーたちを写真におさめている。テーマは「働く人」である。とらえ方が見事である。



私は修理しながら航海するという想像していなかった。よく考えると一年に 3 回の地球一周クルーズ、そしてその合間の春と夏はショートクルーズと運航されるから、船も休む間がないのが実情である。

私はそんな光景を見られたのは良かったと思う。船にしてみても 106 日間の航海というのは非日常ではなく日常になっている。まさしく船上生活そのものを体験している。

■ 船上の食生活

この船には 9 階に 2 つ、4 階に 1 つのレストランがある。9 階はビュッフェスタイルのカジュアルなレストランで、4 階はウェイターが付く本格的なレストランである。

9 階のレストランはうどん、そば、ラーメン、丼ぶり、ハンバーガー、カレーライスなどでどちらかと言うと若者向きのファーストフードのようなメニューである。

一方 4 階のレストランは年配者のために和食中心でカロリーを抑えた比較的ヘルシーなメニューが提供される。時々特別メニューでステーキなどもあるが、基本は低カロリーでメイン料理に小鉢が 2 つくらい、そしてお吸い物になる。

この船でダイエットした人がいる。もともとは太っていた人で、船旅に出たら運動もしないで豪華な食事をとるので太るから止めるようにと周囲から言われていた。しかし健康教室に入り、

ジムに通い、4階のレストランだけで3度の食事をして、間食をしなかったらば105日間で20kgのダイエットに成功したという。この4階のレストランはカロリーをきちんと計算しているのが証明されたのである。

また、若者それも男の子にはこの食事では物足りだろうと思うが、これもそうでもない。4階のレストランは早い時間帯と遅い時間帯という2部制で食事をとるようになっている。どのレストランで食べても良いので、食べ足りない若者は9階で食べてから4階で食べても構わない。

朝も昼も夜もそれは可能であるが、通常は夕食のみガッツリ食べるのが普通であろう。その程度の余裕を見て食材も用意されている。若者のそれも男性の比率が低いからできるのかもしれない。

ヘルシーもガッツリもいけるシステムになっている。偶然かもしれないがすごい。

■船旅は観光に向かない

サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館に行ったオプションツアーは大変混雑していたという。エルミタージュ美術館は世界三大美術館の一つなのでとにかく混雑する。

私たちの船だけで400人が訪れており、他に大型客船が4隻入港しているので、船の客だけでも3000人くらいになる。その他に全世界から観光客が集まってくるので絵を見るのではなく、ごった返したギャラリーをぞろぞろ歩くだけだったという。

旅行会社の落ち度ではないので乗客の怒りのはげ口がないのだが、それでも何人かの人は誰かに矛先を向けないとおさまらないらしい。結局はスタッフの誘導が悪いとか、絵画の種類によってコースを分けるべきだとかいろいろうるさい。何でも人のせいにしないと気が済まない人がいることを改めて思い知る。

本当に絵画が見たいのならば観光シーズンをずらして飛行機で行くことをお勧めする。船の旅は観光地をゆっくり見るには向いていない。

106日の船旅は長そうに思えるが寄港する日は26日で残りの80日が洋上である。ほとんどの寄港地には朝入港して10時頃から下船、帰船は18時頃で、行動範囲はせまい。

帰船時刻は厳守なのと大型バス何台かで移動するので、レストランも大勢の人たちが同時に食べられるところを確保しないとイケない。

例えば横浜港に寄港したとして、私とその条件でツアーを組もうとすると京都にはまずいけないだろう、日光もかなりきびしい。旅慣れた日本人が付いて自家用車や新幹線を駆使しても厳しい。だから一般的にはオプションツアーで東京観光か鎌倉観光くらいだろう。自由行動では横浜観光で終わってしまうだろう。

船旅は80日間の船の生活が主体で、寄港地を堪能しようとするならば別の手段をお勧めする。船の上では、地球一周の船旅でしか味わえないことをすることである。例えばスエズ運河や各海峡の通過、星空の観察、沈まない太陽を相手に一杯やるとかである。

■ビジネスモデル

この船旅ビジネスは、船旅の好きな顧客に地球一周の体験を提供するサービス業である。ビジネスモデルの検討をするには顧客、収入・支出、利益構造、差別化戦略を明確にする必要がある。

現在の顧客は若者と年配者で、中間層の 40 代、50 代は極めて少ない。今回の船旅では若者と年配者の比率が 1:9 くらいである。年々若者の比率が減少している。

収入は地球一周の船旅の乗船代と寄港地でのオプションツアー代金である。

大雑把に推定すると乗客の平均単価を約 200 万円として、定員の 1000 人が乗船すれば一回の地球一周クルーズで約 20 億円の収入になる。事業としては年商約 60 億円である。

支出は船のチャータ費用、クルー350 人の賃金、レストランの食材、ピースボートとジャパングレイスの運営費用にあたる。そして残りが利益になる。

乗船中に聞いたことがあるが、定員 1000 人に対して 600 人以上集まらないと採算がとれないという。つまり船の運航には最低でも約 12 億円かかり、損益分岐点は約 12 億円になる。

従って約 20 億円の収入のうち、乗客数に関係しないチャータ費用、クルーの賃金とで約 12 億円になる。レストランの食材の 6 割くらいも入るかも知れない。

ビジネスとして発展させるためにはチャータ費用を抑えるか多くの人を集めるかである。チャータ費用やクルーの賃金は十分に安いと推測すると、集客に着目する。定員の 1000 人を集めれば約 8 億円の利益が出ることになり、それを次の事業拡大につなげることができる。

飛鳥Ⅱ、ぱしふいっくびいなすなどの日本船では 3 年に一回くらいしか地球一周クルーズを募集しない。クルーズ人口は思ったほど多くないということである。おそらく高額な費用、そして 100 日間も時間が自由にならないことだろう。

このピースボートのオーシャンドリーム号は年 3 回の地球一周クルーズを実施しているから立派なものである。他の船と比較すれば安価とはいえ、それでも人集めは大変である。昔は街で見かけるポスターだけで人集めをしていたが、最近では新聞広告やテレビ CM も打っている。当然この宣伝費用もかなり高い。

時間についてはフライト&クルーズということで最近では部分的に乗船できるようにしている。人気のヨーロッパを中心にしたプランを組むという工夫をしている。ただし飛行機代という別の支出も発生する。

単純に人を集めて運航を継続していくというだけでも大変ということが分かる。

現在ビジネスとして成立している理由は、他に日本船に比較して費用が安いことと若者が多いということである。これは大きなアドバンテージになっている。

私がこの船を選んだ理由もそこにあるからである。この旅行記の中でも書いたが、私たちにしてみれば若者がいる程度の人数がいて活気がある。そこに外国人というスパイスも加わり世界やそのカルチャーを感じさせてくれる。

しかし、その一方で課題も見えてくる。一つは若者の減少である。そして地球一周クラスのクルーズ人口が少ないということである。そのためリピータに頼り、そのリピータの増加は高齢化やモラルの低下につながっていくと懸念される。だから新たな顧客の発掘が必要になる。

■この船の目指すもの

ピースボートの歴史的経緯としては、若者に世界を体験させるために学生 6 人で始めた活動である。多分規模が大きくなるにつれて NGO では商売がやりにくいので商売できるようにジャパングレイスを作ったようである。

実際に乗船しているとピースボートとジャパングレイスの力関係はよくわからない。時おりこの責任の線引きが不明確なところが目につく。そこに責任感の欠如のようなことを感じる。

NGO（非政府組織）であるピースボートは世界平和のためという理想を掲げているが、ジャパングレイスは旅行会社なのでビジネスとして成立しないといけない。

ピースボートは主に船内イベントを担当しており、対外的には船の顔でもある。そして船旅という旅行を催行としているのが旅行会社のジャパングレイスである。旅行代金の回収やオプションツアーの手配などをこの会社が担当する。

船の運航を担当しているのが船会社のシーホークコーポレーションであるが、この船会社はどちらかというと船の運航のみであり表に出てこない。バス旅行を主催する旅行会社が下請けに出したバス会社のようなもので法的な運行責任はあるが、コースや費用、日程などは契約主の指示に従うという感じである。

私が会社に勤めていた時に、企業はまず顧客を明確にすることが必要ということを学んだ。企業が提供するモノやサービスに対してお金を払ってくれる人が顧客と定義される。

その論理でいえば顧客がお金を払う相手が事業者で、ジャパングレイスが責任を負うはずである。そう、お金をもらっているところに責任がある。

ただ、それは 2 つの組織で決めればいいだけの話かもしれない。決めることが重要ということである。

問題は、課題としてあげた若者の減少、高齢化、モラルの低下をどうするか。そして新たな顧客の発掘も考えないといけない。

その対策はあるのだろうか。その答えは当然ある。それも一つではなく、たくさんあると思う。

それには、まずこの船の目指すところをしっかりと決めることである。何を目指して地球一周を運航しているかである。ピースボート、ジャパングレイルは何を大事にしているのか。

初心にかえって若者たちに日本以外の世界を体験させることが大事なのか、儲けてビジネスとして拡大させることなのか、それとも高齢者に生きがいを提供するのか、あるいはそれらの複合体なのか、それ以外もあると思う。

その部分がはっきりしないと、時には船は漂流しているようにも見える。スタッフ一人一人の責任感やスキルにも影響してくる。

何を指すのかを決めないと先ほどの課題は解決しないだろう。逆にそれを決めれば比較的簡単に課題の解決方法は出てくる。何事も目的・目標の設定が重要ということだと思う。

意見やアイデアは乗客からもらってもいいが、決めるのはピースボート、ジャパングレイスの人たちである。

真剣に意見交換して話あうことで、将来にわたって素晴らしい船旅を提供できるようになると思う。そしてそうなって欲しい。